

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	京極御息所と元良親王の恋愛関係をめぐって：『元良親王集』からの検討
Author(s)	顧, 宇豪
Citation	表現技術研究, 16 : 55 - 67
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50851">10.15027/50851</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050851">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050851</a>
Right	
Relation	



# 京極御息所と元良親王の恋愛関係をめぐって

## — 『元良親王集』からの検討 —

顧 宇豪

### はじめに

事いできてのちに、京極御息所につかはしける

もとよしのみこ

わびぬれば今はたおなじにはなる身をつくしてもあはんとぞ  
思ふ

『後撰集』恋五・九六〇に載るこの歌は元良親王の代表作であり、『百人一首』にも収録されている。この歌によって元良親王と京極御息所の密通が暴露された。しかし、この密通の実態は朦朧としている。

藤城憲児氏<sup>(1)</sup>は、①〈修子内親王と結婚した頃〉と②〈御息所が亭子院を居所としていた時期〉の内、①の時期での交渉が虚構で、②の時期での交渉が事実だと指摘している。『元良親王集』において、京極御息所が特別な存在として書かれていることは間違いないと思う。本稿では、まず京極御息所の人物考証を行い、そして『元良親王集』を主な手掛りとして元良親王との恋愛関係の真実を追求し、『元良親王集』の編纂意図との関連性を考察したいと考える。

### 一 藤原褒子の生涯

京極御息所藤原褒子は藤原時平の娘である。時平には全部で五人の娘がいて、それぞれ保明親王・宇多院・実頼・敦実親王・克明親王に配されていた。この五人の娘を正確に記録した系図資料はほぼ存在していないので、筆者は史料を整理し、五人の娘を結婚の推測時期の順によって以下のように配列してみた。

実頼室 <sup>(2)</sup>	延喜十五年(九一五) 正月二十日頃
褒子	延喜十六年(九一六) 五月二十三日頃
仁善子 <sup>(3)</sup>	延喜十六年(九一六) 十月二十二日
克明親王室 <sup>(4)</sup>	延喜十六年(九一六) 十一月二十七日頃
敦実親王室 <sup>(5)</sup>	延喜二十年(九二〇) 以前

『尊卑分脈』<sup>(6)</sup>と『系図纂要』<sup>(7)</sup>では、褒子が時平の長女として記されているが、『本朝世紀』<sup>(8)</sup>天慶八年(九四五)十二月条に「十九日辛巳、(中略)、今夜、正五位下藤原朝臣仁善子卒、仁善子者、故太政大臣第一女、先々坊御息所、王女御母也」とあるように、保明親王室の仁善子こそ長女だと記されている。

注意すべきなのは、時平が既に延喜九年（九〇九）四月四日に三十九歳で薨去<sup>(9)</sup> して、五姉妹の結婚は全て時平亡き後のことだということである。結婚を主導したのは、恐らく時平の長男保忠であろう。『公卿補任』<sup>(10)</sup> によれば、保忠は延喜十四年（九一四）八月九日に二十三歳で参議に就任し、位階は従四位上だった。あまりにも若くて、位も低い。同年の八月二十五日に、叔父の忠平は右大臣に就任し、公卿の筆頭となった。保忠の二人の弟は尚更若く、顕忠が参議に就任するのは承平七年（九三七）、敦忠が参議に就任するのは天慶二年（九三九）のことなので、保忠が実質上一門の家長だと想定する。そのままでは時平一族の栄華が忠平一族に流れてしまうので、保忠が必死に頽勢を引き留めようとして、色々工作したと考える。時平一門による摂関政治の再起計画の中の最も重要な一步は、恐らく仁善子や東宮保明親王に入内させることであろう。しかし、保忠らの実力だけでは極めて困難だったと考えられる。それを実現するために、保忠が妹たちを利用したのである。実頼に嫁がせるのは、忠平一族との友好関係を築くためと考え、褒子を宇多院に入内させるのも宇多院の支持を獲得するためであろう。褒子を宇多院に入内させるのは、恐らく仁善子を保明親王に入内させるための援護射撃だと考える。

褒子の入内に関して、『俊頼髓脳』<sup>(11)</sup> に褒子が元々醍醐天皇に入内する予定だったが、途中で宇多院に奪われたという逸話がある。これもまた京極御息所をめぐる後世の説話の一つであろう。

褒子が宇多院に入内する具体的な時期は不明であるが、褒子に関する最も早い時期の史料は、延喜十六年（九一六）五月二十三日のこととある。『西宮記』<sup>(12)</sup> 臨時八・恩賞事に、

延喜十六年五月廿三日、使右中将衆樹、就亭子院、授褒子位記於其身、行幸日貫

とあるのがそれである。因みに、『日本紀略』<sup>(13)</sup> 延喜十六年三月条に「三日丁巳（中略）太上法皇可有五十御賀（中略）贈太政大臣藤原公第三男奏散手舞」とあるように、宇多院五十の賀に時平の三男敦忠が御前で舞を披露したという記事が見られる。それは時平の子息たちが必死に宇多院のご機嫌を取ろうとする行動だと考えられる。同じ宇多院五十の賀をきっかけに、褒子は宇多院に入内したのであるか。

『大日本史料』<sup>(14)</sup> に見られる褒子関連の史料は、全て宇多院と関連している。延喜二十年（九二〇）四月十三日、雅明親王を出産した。『貞信公記抄』<sup>(15)</sup> 延喜二十年四月条に、「十三日、乙巳、羅利、京極産、西剋」とある。

延喜二十一年（九二二）三月七日に、宇多院と共に春日参詣をした。『躬恒集』<sup>(16)</sup> に、

法皇六条の御息所、かすがにまうづるときに、大和守忠房朝臣あひかたらひて、このくにのなところを、倭歌八首よむべきよし  
かたらふによりて二首おくる、于時延喜廿一年三月七日

とあるように、この頃の褒子が「六条の御息所」と呼ばれており、既に六条に位置する河原院に移住していたのであろう。河原院に移住することに關して、『大和物語』<sup>(17)</sup> 六十一段に、

亭子院に、御息所たちあまた御曹司してすみたまふに、年ごろありて、河原院のいとおもしろくつくられたりけるに、京極の御息所ひと所の御曹司のみしてわたらせたまひにけり。（後略）

とあるように、京極御息所の部屋だけが設けられた。『拾芥抄』<sup>(18)</sup>

によれば、亭子院は「七條ノ坊門北（南）西洞院西二町、寛平法皇御所、元東七条ノ后（温子家）」とあり、河原院は「六条ノ坊門南萬里小路東八町云、融大臣家、後寛平法皇御所、（号六条院）本四町京極西、号東六条院」とあり、両者の位置関係は案外近い。褒子には宇多院の寵愛を独り占めにする程の魅力が備わっていたのであろう。

京極御息所の魅力は単に美麗な容貌にあるのではなく、宇多院の美意識と頗る相応していたのであろう。春日参詣の同年に、『京極御息所褒子歌合』（19）が催された。

この歌合は春日参詣の途中に大和守忠房が献上した果物二十籠に添えた色紙に書かれた歌に対する返歌という形の歌合である。この

『京極御息所褒子歌合』の史的評価について、萩谷朴氏（20）が、

本歌合が歌合の歴史に占める地位は頗る重大である。晴儀の歌合としては、延喜十三年亭子院歌合から天徳内裏歌合に到る間の一つの大きな導標となつてゐるし、宮廷の歌合が、方人構成の人的要素からいつて、より女性中心のものに移してゆく過程を示しているものであるということも出来る。（中略）このような新様式が考案されたということは、一つに宇多法皇の、文芸の指導者もしくは享受者としての創造性乃至は想像力の豊かさを物語るものであろう。

と説かれるように、宇多院が自身の美意識を主張するために開催した当時の風流の最先端にある晴儀の歌合だと考えられる。従つて、そのような歌合に名を冠された京極御息所は、当時では「宇多院流」の代表を務めた貴婦人だと言えよう。

延喜二十一年十二月十七日、雅明親王は親王宣下を受けた。『日本

紀略』延喜二十一年（九二二）十二月に十七日条「以第十親王雅明為親王、實者法皇御出家之後所生皇子也、為今上御子」とあるように、雅明親王は宇多院出家後に生まれた親王なので、醍醐天皇の猶子として親王宣下を受けた。後の花山院にもそのような事例があった。今井源衛氏（21）によれば、花山院が出家後に乳母の子の中務とその娘の平子との間にそれぞれ昭登親王と清仁親王を儲けた。その二人の皇子は冷泉院の猶子として、親王宣下を受けた。こうした法皇の皇子が親王宣下を受けた事例は、やはり法皇の女性に対する寵愛と深く関連していると考える。

延喜二十二年三月二十日、雅明親王の年給を寛平親王に準ずる記事がある。『醍醐天皇御記』（22）延喜二十二年三月条に「廿日、自院令公頼朝臣仰雅明親王給可預寛平親王列事」とある。

延長二年（九二四）三月十一日に、『日本紀略』に「天皇幸中六条院」という記事がある。『貞信公記抄』によれば、それは雅明親王を見舞うためである。『貞信公記抄』延長二年に、

三月十日、明日欲行幸六条院、仍右大臣参入、召仰、有召、称病不参、

十一日、行幸六条院、御覧十親王、親王・公卿・殿上侍臣賜饗禄、畏者二枝有奉今上、

とある。また、

十二日、有召、依病不参、依十皇母氏位記事召者、

十三日、有召、依病不参、京極叙二位、

とあるように、京極御息所は雅明親王の出産により、二位に叙位された。

そして、延長三年(九二五)十二月九日、行明親王を出産した。『貞信公記抄』に「九日、京極産男口」とある。延長四年生まれという記述が多く見られるが、十二月生まれなので、年を越えたら、すぐさま二歳となるから、修正が加えられたのであろう。

『系図纂要』によれば、京極御息所は載明・雅明・行明三人の親王を出産している。載明親王に関しては、記録が一切見られないので、早くに夭折したのであろう。雅明親王も延長七年(九二九)十月二十三日に、十歳の幼さで薨去した。

延長四年(九二六)九月二十八日、宇多法皇六十の賀が設けられた。『日本紀略』に「廿八日、京極御息所奉賀賀法皇六十御筭」とある。

『貫之集』<sup>(23)</sup>に「延長四年九月法皇の御六十賀、京極のみやす所のつかうまつり給ふ時の御屏風のうた十一首」という詞書を付す十一首の屏風歌がある。

また、『大和物語』第三段には、時に参議兼大蔵卿<sup>(24)</sup>の源清蔭に六十の賀の献上品の鬘籠を依頼するエピソードがあり、京極御息所が宇多院六十の賀のために尽力した。

しかし、こうした宇多院に全てを捧げた京極御息所の人生は幸せな結末を迎えなかった。前述した延長七年(九二九)十月二十三日の雅明親王の夭折はその序曲にすぎなかった。崩壊の始まりは、承平元年(九三二)七月十九日に、宇多院が春秋六十五にして崩御したことである。

宇多院崩御前後に関する史料には、京極御息所の姿が多く見られる。

『貞信公記抄』承平元年

(七月)二日、近日法皇重煩給、其御病血痢也、依有所勞、不能参候之也、示達京極

(九月)八日、法皇七日御誦經修東寺、有内裏御誦經、又京極於仁和寺有造佛、写經法事

『吏部王記』<sup>(25)</sup>承平元年七月

廿日、云々、亥時奉移法皇於大内山魂殿、式部卿親王・京極御息所腹童親王喪服

『吏部王記』にある「京極御息所腹童親王」は行明親王であろう。宇多院崩御の際に京極御息所が詠んだ哀傷歌が『後撰集』哀傷・一四〇四に収録されている。

法皇の御ぶくなりける時、にびいろのさいでにかきて人におくり侍りける  
京極御息所

すみぞめのこきもうすきも見る時はかさねて物ぞかなしかりける

この歌から、宇多院に対する深い思いが見られる。

しかし、悲劇の歯車が止まることはなかった。『系図纂要』によれば、宇多院との間に生まれた行明親王が天曆二年(九四八)五月二十七日に二十四歳の若さにして薨去した。行明親王は、『後撰集』に歌二首が収録されており、有智高才の若き皇子だったのであろう。これは京極御息所が後に仁和寺にて出家する決定的な理由だと考えられる。『後撰集』雑一・一一一九に、

京極のみやす所、尼になりて戒うけんとして、仁和寺にわたりて侍りければ

あつみのみこ

ひとりのみながめてとしをふるさとのあれたるさまをいかに見  
るらむ

という敦実親王の歌がある。『系図纂要』によれば、敦実親王が天慶四年（九五〇）二月三日に仁和寺にて出家したので、京極御息所の出家はそれ以降となるであろう。一生を捧げた主人の宇多院を亡くし、次に我が子とも全員死別し、時平一族の再起計画も保明親王の早逝と仁善子腹の慶頼王の夭折により破綻し、政治の中心も忠平一族に移ってしまった。浮世への未練がもはや何一つ残らず、京極御息所は空門に入ったのであろう。

以上のように、京極御息所の人生は運命に翻弄されていた。父時平の早死により、一族の復興のために、年老いた宇多院に入内させられた。幸い、宇多院に寵愛されて時めき、栄華を極めた貴婦人となった。しかし、老齢の宇多院は他界し、その間に儲けた皇子たちも悉く亡くなってしまった。そして、東宮の次々の早逝により、一生を捧げた一族の復興計画も泡沫に帰した。京極御息所は女性として、一時的に栄華を極めたけれども、兄の野望に利用され、父・夫・息子に悉く先立たれ、あまりにも不幸な人生だったと言えよう。

## 二 亭子院での元良親王の懸想

京極御息所の『元良親王集』での初見は、  
京極の御息所を、未だ亭子院にははしける時、懸想し給  
ひて、九月九日に聞こえ給ひける

35 世にあればありと言ふことを菊の花なほ好きぬべき心ちこ  
そすれ

夢の如逢ひ給ふて後、帝に慎み給ふとて、え逢ひ給はぬ  
を、宮に侍ひける清風が詠みける

36 麓さへ熱くぞありける富士の山嶺に思ひの燃ゆる時には  
とあるように、京極御息所がまだ河原院に移住しておらず、亭子院に  
いる時に遣わした懸想の歌である。

宇多院が亭子院にいた時期に関しては、中宮温子が崩じた延喜七年（九〇七）六月七日<sup>26</sup>以降だと考えられ、延喜八年（九〇八）秋に亭子院が既に運用されていた。『大日本史料』所収の『體源抄』によれば延喜八年秋に亭子院で前裁合が行われ、延喜楽が演奏されたという。宇多院と関連する亭子院に関する最後の記事は、『日本紀略』延喜十七年正月条の「廿四日甲戌、天皇幸亭子院拜賀太上法皇」とある記事である。

宇多院の河原院と関連する最も早い記録は、『日本紀略』延喜十七年（九一七）十月六日条に「太上法皇於河原院賀大納言源昇七旬御筭、王卿宴飲」とある。河原院に移住した後の最も早い記録は、『貞信公記抄』延喜十八（九一八）年十二月条に「九日、參六条院、依御薬事也」とある。河原院の元の主の源昇の薨去について、諸資料によれば延喜十八年（九一八）六月二十九日となるので、宇多院が河原院を入手したのはその後の事になるであろう。宇多院が河原院に移住すると共に、京極御息所も河原院に移したであろう。『大和物語』によれば、河原院には京極御息所一人の部屋しか設けられなかったが、それは時間が差し迫っていたことも一つの原因だと思う。

以上のように、京極御息所が亭子院にいた時期は、主に叙位された延喜十六年(九一六)から延喜十八年(九一八)までの期間だと考えられる。

『元良親王集』三十五番歌詞書に「九月九日」という明確な日付が示されていることに注目したい。九月九日は重陽の節句で、『西宮記』によれば、この日に内裏において九日宴が行われる。元良親王も出席する必要があると考えられる。例え自然災害などの諸事情により宴会が中止されたとしても、宜陽殿において坏酒を下賜する儀式<sup>(27)</sup>がある。つまり、九月九日は元良親王にとって特に忙しい一日だと考えられる。勿論、亭子院においても、宇多院後宮の女性たちが菊の観賞や菊酒を飲むなどの行事を催すはずなので、人目に立つ時だと思われる。以上の二点を踏まえれば、九月九日当日に懸想の歌を詠み、従者を派遣して、京極御息所のもとに歌を届けるのは至難の業だと推測できる。それを成し遂げるためには、緻密な計画が必要となるのである。まず歌を事前に作り、そして信頼できる従者に委託する必要がある。信頼できる従者とは恐らく三十六番歌詠者の清風であろう。その従者もまた亭子院の内部に信頼できるパイプを持つていなければならぬ。九月九日という人目を引く日に、清風が亭子院に忍び込んで、パイプ役に歌を渡して、そしてパイプ役が歌を京極御息所の手に届けるといえるのは、勿論、京極御息所が宇多院に告知するかどうかも事前に把握しなければならぬので、とにかく困難極まりないことだと想像できる。それでも、特にこの日を狙って、人々の注目が重陽の行事に集まる隙に、執行したのだろうか。以上のことが実際行われたならば、隅々まで計画しなければならぬし、更に敢行する勇氣も必要で

ある。三十五番歌は元良親王の「懸想」と好色心を最大限に表現したものと考える。

しかし、三十六番歌詞書の「夢の如逢ひ給ふ」によれば、二人の逢瀬は他の日のこととなるようである。別の日にも亭子院に忍び込む隙があり、しかも今回は元良親王自ら潜入したという。つまり、亭子院は宇多院が留守になり、且つ警備が薄い日が他にあつたのだと考えられる。だとすれば、九月九日に懸想歌を送るのは特にメリットがないのではないかと思う。「菊の花」が詠まれているとは言え、菊は重陽の日に限定するものではなく、秋から初冬にかけて詠まれている。京極御息所に懸想したことは恐らく事実で、元良親王の大胆な性格から亭子院にいる京極御息所に歌を送るという行動もあり得る。しかし、三十五番歌詞書の「九月九日」に関しては、あまりにも都合のよい日付となっており、虚構性があると疑わざるを得ないであろう。編者が当該歌に詠まれた「菊の花」に重陽の節句を連想させようと、「九月九日」という日付を設定したのであるか。ただ「九月九日」という日付に関しては虚構の疑惑があるものの、亭子院での密通は完全な虚構だとは断定できないであろう。

そして、「夢の如逢ひ給ふ」をし、京極御息所との逢瀬が成就した。元良親王から並はずれた情熱を込めた歌を贈られ、一度でも話してみたいという好奇心が生まれたのであろう。宇多院は既に五十歳を過ぎていたので、男性的魅力においては、若い元良親王に劣ると考える。また、後に宇多院の寵愛を独占したことから、『源氏物語』の桐壺更衣のように、亭子院に住む宇多院の後宮女性たちに妬まれていたとも考えられる。それで、ついに元良親王に心を許してしまったのである

う。

しかし、その逢瀬はあくまで「夢の如」なのであり、まさに奇跡に近かったと思われる。「帝に慎み給ふ」とあるように、さすがに宇多院に憚っている。類似する事例が『後撰集』春下・一〇二にもある。

元良のみこ兼茂朝臣のむすめにすみ侍りけるを、法皇のめし  
てかの院にさぶらひければ、えあふことも侍らざりければ、  
あくる年の春さくらのえだにさしてかのさうしにさしおか  
せ侍りける

花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ

兼茂の娘が宇多院に召されて、逢えなくなるといふことがあった。やはり、元良親王にとつて、宇多院は恋の強敵である。そんな強敵に憚つて恋に身を焦した元良親王の様子を見て、親王に仕える清風が三十六番歌を詠んだ。

清風という人物について、『元良親王集全注釈』<sup>(28)</sup>によれば、『尊卑分脈』に陽成天皇の異母弟源長猷の長男嘉樹(嘉種)の次男が、清風と記されている。官職は従五位下越中介である。清和源氏として、元良親王の甥にあたるので、身内として仕えた可能性がある。また、清風の父嘉種について、『大和物語』七六段・七七段・一一七段に登場し、桂宮皇子内親王との恋愛が見られ、結構な色好みである。三十六番歌詞書に明記した清風の名は、恐らくその色好みの父嘉種を彷彿させるための仕掛けとなっている。三十六番歌の「清風」は嘉種の子の清風である可能性が高いと考える。

元良親王が京極御息所に傾倒する心はよく分かる。元良親王は飽きっぽい人で、女性との関係が長く持続しなかった。しかし、京極御息

所との恋愛は、差し障りが多く、あまりにも困難ではあるが、逆にその希少性が元良親王の恋心を刺激することになる。極めて困難、且つ危険な逢瀬だからこそ、その価値を過大に認識し、恋心を募らせたのであろう。それ故、実際の所、元良親王と京極御息所の逢瀬の回数は一極めて少ないと考える。

もつとも、三十五番歌詞書の「京極の御息所を、未だ亭子院にははしける時」は既に密通の舞台を河原院ではなく亭子院に限定している。従つて、二人の密通は京極御息所が亭子院にいた延喜十六年(九一六)〜延喜十八年(九一八)の期間だからこそ起きたことで、河原院に移つてからはほぼ不可能であつたであらう。

### 三 修子内親王と初婚時の京極御息所との交渉

『元良親王集』には、修子内親王と結婚した当初における京極御息所との交渉がある。

同じ御中にまだしくおはしける時、この宮におはし始め

てまたの日、京極の宮す所のお許に奉り給ひける

64 いとどしく濡れこそまさされ唐衣逢坂の関道まどひして

宮す所の御返し

65 まことにや濡れけりやとて唐衣ここに來たらば問ひて絞らむ

先々通はせ給ひける御文ども、今は返し奉れ給ふとて、

宮す所

66 破ればをし破らねば人に見えぬべしなくもなほ返すま

されり

六十四番歌詞書が示すように、当時の元良親王は京極御息所と交際を開始し、その同じ頃に修子内親王にも通いはじめ、その初夜の翌日に、京極御息所に歌を贈ったという。修子内親王と結婚する時期は延喜二十年(九二〇)以前<sup>(29)</sup>のことだと推定され、しかも修子内親王の生年、延喜四年(九〇四)〜延喜六年(九〇六)<sup>(30)</sup>を考慮すれば、結婚時は延喜十年代後半だと推測できる。前章で述べたように、京極御息所との密通は主に亭子院で行われ、京極御息所が亭子院にいる時期について、延喜十六年(九一六)〜延喜十八年(九一八)という期間だと推測されているので、時期的には噛み合う。藤城憲児氏<sup>(31)</sup>は、御息所は延喜二十年から延長三年の間に三人の皇子を産んだと思われる。宇多上皇の寵を受け、懷妊・出産が続いたばかりか、春日社参詣・歌合・親王宣下・親王年給・御息所自身への叙位といった寵愛ぶりの知られるこの間に、御息所と元良親王との熱愛があったとは考えにくいのである。

との理由から、

①(修子内親王と結婚した頃)に元良親王と御息所の交渉があったとする家集の記述並びに配列は事実には背くとすべきではなからうか。

と言われ、修子内親王と結婚した当初の京極御息所との密通は虚構だと主張している。しかし、藤城憲児氏は修子内親王の生年を延喜六年(九〇六)〜延喜九年(九〇九)と推測し、結婚時期も「延喜末年から延長初年にかけて」と想定したので、当該贈答の時期を「延喜二十

年から延長三年」と誤算したと考える。

六十四番歌の内容を見れば、元良親王が京極御息所の許に通わなかったことについて、道に迷ったと誤魔化し、また訪れたいと厚かましく言っている。別稿<sup>(32)</sup>で論じたように、修子内親王は狛野に住む未熟な田舎娘なので、やはり当代の名媛である京極御息所の方を恋しく思ったのであろう。

六十五番歌の京極御息所の返歌を見れば、元良親王の言い訳を完全に看破したが、「ここに来たらば問ひて絞らむ」という表現から、元良親王を責めながらも誘っている意向が読み取れるので、この恋に対する京極御息所の本気度も窺える。

宇多院の怒りを買う危険を冒してまで、わざわざ九月九日に亭子院にいる京極御息所に歌を贈るのだから、京極御息所の心を射止めたのである。しかし、元良親王の好色の本性は相変わらずで、実際はじめたにもかかわらず、なんと修子内親王と結婚した。女としてのプライドからも勿論許しがたく、京極御息所は呆れてしまったのである。そこで六十六番歌のように、前からの手紙を全て返却し、絶縁を申し入れたのだと考える。

京極御息所が元良親王との絶縁を決意した理由に関して、勿論恋愛面において、浮気性の元良親王に対する嫌悪感が考えられるが、肝心なのは、京極御息所は時平一門の復興のために宇多院に入内したので、あって、言い換えれば、政治権力と引き換える人質のようなもので、密通が発覚したら、個人だけではなく、時平一門に大きな支障をもたらすことになる。京極御息所の立場から考えると、宇多院を裏切ることはできないのである。元良親王との密通はあくまで若さゆえの一時的

の気の迷いに過ぎないであろう。この意味で、京極御息所には実に藤原北家の出身者に相応しい現実主義者の一面があると思う。残念ながら、元良親王との密通は隠し切れず露見して、京極御息所の人生最大の汚点として、今日まで伝えられてきたのである。

#### 四 「わびぬれば」の歌について

『元良親王集』一二〇番歌「わびぬれば」の歌は前述の通り、『百人一首』に収録された歌で、元良親王の代表作として知られている。

こと出できて後、宮す所に

120 わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしてもあはんとぞ思ふ

『後撰集』での記載とほぼ一致しており、返歌がなく単独に家集に収録されていることから、『後撰集』による増補だと、『元良親王全注釈』<sup>(33)</sup>も指摘した。『元良親王集』と『後撰集』に直接な関係があることは証明できないが、『後撰集』にある当該歌があまりにも有名なので、そのままの形で『元良親王集』に採用されたと考える。

さて、当該歌が詠まれた時に京極御息所との密通が露見したという。前述のように、京極御息所との密通は主に京極御息所が亭子院にいた時のことで、密通の露見もその時の出来事であろう。時間軸を考えれば、六十六番歌の恋文返還の後のことだと推測される。そのことにより、京極御息所が河原院に移されることが予定より早まり、倉卒の間に一人で移されたのではないかと思う。

京極御息所に関する史料には、密通の露見のことは一切見当たらない。しかし、勅撰集である『後撰集』が京極御息所の人生の一大スキャンダルを暴いた。京極御息所にとっては、大変不名誉なことだと思われる。『後撰集』に撰入された理由について考えておきたい。

片桐洋一氏<sup>(34)</sup>によれば、『後撰集』の編纂開始は天曆五年(九五)十月で、完成時期は天曆九年(九五五)正月(天徳二年(九五八)正月だと想定されている。この時期では、元良親王は既に薨去し、京極御息所も仏門に入っていた。高貴な宇多上皇妃とは言え、あくまでも過去の話で、天曆年間には密通というスキャンダルも禁忌にはならないであろう。また、その時に朝廷の政治を牛耳っているのが忠平一族なので、時平の娘の京極御息所のスキャンダルが世に知られるのも都合の悪いことではなからう。

密通が露見した後の処置に関する記録はない。元良親王は陽成院の親王なので、多分直接的な処罰はうけなかったであろう。京極御息所に関しては、宇多院の寵愛もあって、河原院に一人で移され、厳重に警護されたであろう。実質的な処罰はなかったかもしれないが、元良親王よりも京極御息所の方が危うい立場に立つことは間違いない。それにもかかわらず、元良親王は当該歌を京極御息所に送り、灼熱の恋心を打ち明け、まだ逢いたいと申し出た。歌には凄まじい情熱が込められているとは言え、あまりにも一方的で、京極御息所の立場や気持ちに対する配慮が全く見えない。「侘ぶ」のも、「身を尽くす」のも、「あはんとぞ思ふ」のも、元良親王側の感情と欲求に過ぎず、京極御息所に押し付けるように表現している。自分勝手に思い遣りが足りないとと思う。

## 五 その他の歌

『元良親王集』には、京極御息所に関する歌がその他に三首あり、それらの歌を解説することにより、元良親王と京極御息所の恋愛の経過をよりリアルに思い描ける。

京極の宮す所

153 吹く風にあへでこそ散れ梅の花あだに匂へる我が身となみ

そ

京極御息所

166 思ふてふことよに浅くなりぬなり我憂くばかり深き事せじ

また、花柑子奉り給ふ時

167 鶯はなかむしづくに濡れねとや我が思ふ人の声のよそなる

一五三番の京極御息所の歌は、自分が世間の目に堪えられないから関係を終わりにするので、いい加減な気持ちでいた女だと思わないでほしいという。この歌が詠まれた時期は、京極御息所が元良親王と交際しはじめてから少し経ってから、やはり世間の圧力を感じて怯えた頃であろう。なお、この歌は絶縁を申し出ているが、きちんと客観的な理由を述べ、そして自分がいい加減な女ではないと言っているで、相手にとっても自分にとっても体面を保てる表現であり、京極御息所の教養と気品の高さが滲み出している。

一六六番歌では、京極御息所は、元良親王の軽薄な「思ふ」という言葉が、全く誠意のないものになり、このような自分だけが傷つく深い関係はもう持たないという。この歌が詠まれた時は、既に破局間近であろう。元良親王の「思ふ」といった言葉に対して、京極御息所は

全く信用しなくなつて、下の句では感情のありのままに元良親王を強く非難している。この歌は他の京極御息所の詠歌と違い、元良親王に対する配慮が一切なくて、ただ重ねて裏切られた悲憤を訴えている。これこそは京極御息所の女としての素の感情であり、関係がかなり深まった段階で元良親王の本性を看破して、絶望したから、建前を構えずに言えるものである。この歌からは、両者の関係が深い段階に進行しており、そして、元良親王の浮気性のひどさも想像される。

一六七番歌は、一六六番歌をうけて、元良親王が京極御息所に柑子の花を献上した際に添えた物名歌である。上の句では、元良親王が自分を花の雫に濡れる鶯に喩え、すなわち恋に泣くという。その原因は、下の句にある「我が思ふ人の声のよそなる」という、恋人が離れた場所にいるからという。悲憤に満ちた一六六番歌を受け取り、なお自分の浮気性という本質の問題を避けて、正に一六六番歌でいう「思ふ」を軽々しく強調するとは、さすがに懲りない男である。下の句によれば、京極御息所は既に元良親王から離れた所に行つてしまつており、河原院に行つたかもしれない。

以上の三首の歌は、『元良親王集』にしか収録されていない。京極御息所と元良親王の恋愛関係に関しては、本家集の編者がいかにも関心を寄せていることが分かる。

### むすび

元良親王と京極御息所の密通は有名であるが、その実態はほとんど

解明されていなかった。本稿は、密通の実態について探ってみた。虚構であるといった先行研究もあるが、史実である可能性は十分あると考える。ただ有名な「わびぬれば」の歌から連想するどろどろの恋愛ではなく、儂い忍びの恋だと考える。これまでに考察したように、京極御息所は時平一門の復興のために全てを宇多院に捧げた人で、「いみじき色好み」元良親王の人生の軌道とはあまりにも相容れないので、その恋は決して成就することがないであろう。ただ京極御息所の定められた狭苦しい人生の中で、自由奔放な元良親王との恋愛は、一時の慰めになったと察せられる。しかし、元良親王は極めて浮気気質な人で、その意味で、また京極御息所の薄幸の一つに数えられてしまふ恋愛であろう。『元良親王集』で見られる京極御息所の歌は、大体元良親王の浮気性を責めているけれども、それも元良親王を本気に愛していたからこそ、恨みに変わり、歌に留めたのだと推測する。実際、京極御息所の詠作は、『後撰集』にある宇多院を哀悼する歌以外、ほぼ全て『元良親王集』に収録されている。元良親王に対して特別な感情を抱いていたからこそ、歌の贈答を行ったのであろう。現実主義者とはいえ、京極御息所も畢竟するに女なのである。

『元良親王集』が京極御息所との密通の内容を採録したのは、やはり宮廷女房社会においていかにも話題性があるからであろう。三十五番歌に「九月九日」という具体的な日付が書かれて、三十六番歌に「清風」という詠者名を記し、六十四番歌を修子内親王との結婚当初の交渉とし、六十六番歌で『後撰集』での記載を訂正するなど、随所に工夫が施されている。編者はやはり京極御息所との密通を本家集のハイライトとして編纂したと考え、その点を評価したい。

### 〔付記〕

本稿において、『元良親王集』の本文は『冷泉家時雨亭叢書 64 平安私家集 十二』（朝日新聞出版、二〇〇八年）所収の冷泉家時雨亭文庫本を底本とし、適宜校訂を加えたものである。底本にない和歌を、『龍谷大学善本叢書十八 四十人集 二』（思文閣出版、一九九八年）所収の龍谷大学写字台文庫四十人集本により補った。各歌の歌番号は、便宜上、『新編国歌大観』の歌番号と一致させた。

本稿において引用した和歌は、特に断らない場合は『新編国歌大観』により、それ以外は、その底本の名を明記した。『後撰和歌集』の歌番号は天福本の一四二五首に準ずる。

人物の年齢に関しては、全て数え歳となる。

### 注

- (1) 藤城憲児「元良親王集の虚構——京極御息所に触れながら」（『湘南文学』27号、一九九三年三月）。
- (2) 実頼の生年は、『尊卑分脈』の「天祿元年五十薨<sup>七二</sup>」により、昌泰三年（九〇〇）。元服の記録は、『日本紀略』延喜十五年正月条に「廿日辛亥、右大臣男藤原朝臣實頼加元服」とある。『尊卑分脈』に三人の息子（敦敏・頼忠・斉敏）の母は全て時娘である。
- (3) 東宮保明親王の元服の日は延喜十六年（九一六）十月二十二日。東宮元服に従って、時平の娘仁善子は入内。『醍醐天皇御記』

延喜十六年十二月条に次のようにある。

廿一日、(中略)、申東宮元服夜故左大臣女可令参入事、又参入時可用輦車報書并許

(4) 同延喜十六年十一月二十七日克明親王元服。『尊卑分脈』に長男の博雅の母は時平娘。元服と共に結婚したと考える。

(5) 敦実親王の元服は『系図纂要』によれば延喜七年となるが、時平娘腹の長男の雅信が『尊卑分脈』の「承平三十二廿四昇殿<sup>年十</sup>」によれば延喜二十年生まれなので、結婚の時期は延喜二十年直前だと考える。

(6) 『新訂増補国史大系 尊卑分脈』(共五冊)(吉川弘文館、一九六〇～一九六七年)。以下同じ。

(7) 『系図纂要』(全十八冊)(名著出版、一九七三～一九七七年)。以下同じ。

(8) 『新訂増補国史大系 第九卷 本朝世紀』(吉川弘文館、一九三三年)。

(9) 『系図纂要 第二冊』(名著出版、一九七〇年)。その他の系図資料からも確認できる。

(10) 『新訂増補国史大系 第五十三卷 公卿補任 第一篇』(吉川弘文館、一九三八年)。

(11) 橋本不美男ほか『新編日本古典文学全集 87 歌論集』(小学館、二〇〇二年)所収「俊頼髓脳」。

(12) 『増訂故実叢書第卅七回 西宮記第一』(吉川弘文館、一九三一年)

(13) 『新訂増補国史大系 第十一卷 日本紀略後篇 百鍊抄』(吉

川弘文館、一九二九年)。以下同じ。

(14) 東京大学史料編纂所『大日本史料』データベース(<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>)。以下同じ。

(15) 東京大学史料編纂所『大日本古記録 貞信公記』(岩波書店、一九五六年)。

(16) 『新編国歌大観 CD-ROM Ver. 2.0』(角川書店、二〇〇三年)による。

(17) 片桐洋一ほか『新編日本古典文学全集 12 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(小学館、一九九四年)。以下同じ。

(18) 『増訂故実叢書第十一回 拾芥抄 禁秘抄考註』(吉川弘文館、一九二八年)。

(19) 注(16)に同じ。

(20) 萩谷朴『増補新訂 平安朝歌合大成 第一卷』(同朋舎出版、一九九五年)。

(21) 今井源衛『国語国文学研究叢書 8 花山院の生涯』(桜楓社、一九六八年)。

(22) 『増補史料大成 第一卷 歴代宸記』(臨川書店、一九六五年)。

(23) 注(16)に同じ。

(24) 注(10)に同じ。

(25) 『史料纂集 吏部王記』(続群書類従完成会、一九七四年)。以下同じ。

(26) 注(13)に同じ。

(27) 『西宮記』九月 九日宴  
十三年、依諸国損無宴 王卿着宜陽殿、召侍従奏見参、賜菊酒、

右少将藤俊隆、賜氷魚高坏、式部卿親王執盃、令飲七盃

- (28) 片桐洋一・関西私家集研究会『和歌文学注釈叢書Ⅰ 元良親王集全注釈』（新典社、二〇〇六年）。

- (29) 『元良親王集』六十二番歌

母宮す所の御もとに、御衣のほころび縫ひに奉れ給へりければ、宮す所

返しける人唐衣と思ふには常ならぬ香ぞ添ひてめでたき

によれば、元良親王は修子内親王と結婚後、姑の満子女王に服の修繕を依頼した。『貞信公記』延喜二十年六月条「廿七日、大輔更衣芳中頓滅」によれば、満子女王は延喜二十年（九二〇）に卒去。よって、元良親王と修子内親王は延喜二十年以前に結婚したと判断した。

- (30) 『系図纂要』によれば、醍醐天皇第七皇女婉子内親王の生年は延喜四年（九〇四）。醍醐天皇第九皇女敏子内親王の生年は『一代要記』の「延喜十一年十一月八日為内親王年六歳」によると延喜六年（九〇六）。従って、醍醐天皇第八皇女修子内親王の生年を延喜四年（九〇四）〜延喜六年（九〇六）と推定した。

- (31) 注（一）に同じ。

- (32) 『元良親王と修子内親王という奇妙な夫婦——『元良親王集』からの検討——』（『国文学攷』二四八号、二〇二〇年十二月）。

- (33) 注（28）に同じ。

- (34) 片桐洋一『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年）。

〔追記〕

本稿と関連する内容として、「二条の君という女性——『元良親王集』・『大和物語』からの検討——」という論文を発表する予定である。

（こ うごう、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期在学）